

令和4年2月

◆池田亮二 選 ～絵手紙で振り返る令和三年～

#### 四、七光りの人間模様

味より見栄えなべて世襲の瓜なすび



内閣が変わるたびに、二代目三代目の世襲の顔が増えるようです。明治維新でそれまで続いていた大名や上級武家の世襲による政治支配はご破算になり、下級武士が一挙に大臣や高級官僚になるなど、能力のある者は誰でも立身出世できるようになったはずなのに。福沢諭吉は「門閥制度は親の敵でござる」とまで言って、親の七光りで官位につくものを排撃したものです。

それから百五十年、その間、薩長閥や官閥、軍閥などの葛藤もありましたが、日本が豊かになり太平の世が続くと、いつの間にかまた毛並みのいい門閥の人だけが勝ち残るといったことになったようです。

もはや世の中を無理にかき廻すような威勢のいい成り上がりよりも「よきにはからえ」型の殿様の方が安心なのでしょう。以前はどんな雑種でも、強くて頼りになる犬が番犬として飼われたものですが、今は、血統書付きの可愛いらしくこじんまりした犬が珍重されるようです。

## 五、再生工場万歳！

栄枯盛衰大兵肥満のちゃんこ番



照ノ富士は、大関から序二段まで陥落し、再び這い上がって横綱に昇りつめました。落ち目になった力士が復活するのは大変なことです。

スクラップになりかけた選手を拾いあげてトップ選手に育てあげたことでは、野球の野村監督が有名で、野村再生工場とも言われました。ということは、有能選手をスクラップにするというもったいないことをした監督も多くいるということでしょうが、それにしても、相撲の再生工場というのは珍しいことです。照ノ富士を支えた伊勢ヶ濱親方も立派なものだと思います。

昨日まで可愛がっていた後輩に、今日からは付け人として仕えなければならない屈辱感、負け相撲の口惜しさ以上のものだったでしょう。相撲社会では、ちゃんこ鍋も上の力士から順に食べるとか。序二段の照ノ富士が考えていたことは、ちゃんとおれの分まで肉や鳥、魚を残しておいてくれよ、ということだったかも。

## 六、お姫様の恋悲し

宮様の恋眉をひそめつことほぎつ



真子姫が、めでたく結婚された。皇室の行事はなく、ひんやりとした空気の中で。何故でしょう。お姫様の結婚には「白馬の王子様」の物語を期待するからです。たくさんの難題を出し、多くの若者がそれに挑んで敗退し、最後に勝ち残った若者がめでたく姫と結ばれる。そうであれば、たとえ釣り合いがどうであれ、お姫様を勝ち取った者は堂々と祝福されるのです。

でなければ、別の物語もあります。映画「ローマの休日」の王女ヘップバーンと、新聞記者グレゴリーペックのように、互いの思いを胸に秘めつつ、黙って遠くから別れを告げるのです。

真子さんは、そのどちらでもなく、ただ普通の女の子になって、白いウエディングドレスを着たかっただけなのかもしれません。

結婚して一般人になっても騒がれ続ける真子さんは気の毒でなりません。